

自由の民として

[エゼキエル書 13章 8～12、22～23 節]

それゆえ、主なる神はこう言われる。お前たちはむなしいことを語り、欺きの幻を見ているので、わたしはお前たちに立ち向かう、と主なる神は言われる。わたしの手は、むなしい幻を見る預言者たちと、欺きを占う占い師たちに向けられる。彼らはわたしの民の集いに加えられず、イスラエルの家の記録にも記されず、イスラエルの土地に入ることもできない。そのとき、お前たちはわたしが主なる神であることを知るようになる。平和がないのに、彼らが『平和だ』と言ってわたしの民を惑わすのは、壁を築くときに漆喰を上塗りするようなものだ。漆喰を上塗りする者に言いなさい。『それは、はがれ落ちる』と。豪雨が襲えば、雹よ、お前たちも石のように落ちてくるし、暴風も突如として起こる。壁が崩れ落ちれば、『先に施した上塗りはどこに行ったのか』とお前たちは言われるに違いない。」

「お前たちは、わたしが苦しめようとはしていないのに、神に従う者の心を偽りをもって苦しめ、神に逆らう者の手を強め、彼らが悪の道から立ち帰って、命を得ることができないようにしている。それゆえ、もはやお前たちがむなしい幻を見ることも占いをすることもなくなる。わたしは、お前たちの手からわが民を救い出す。そのときお前たちは、わたしが主であることを知るようになる。」

[1] 今日 8月15日

今日の主日は、丁度8月15日になりました。私が覚えている限り、日曜日と敗戦記念日が重なるのはかなり久しぶりではないかと思えます。戦後67年ですか。けれども、まだ靖国神社に大臣などが参拝に行ったりしているのを聞くと、私などはこの国はまだきちんと戦争の後始末というものが出ていないのではないかと思えます。

戦争という局面に入りますと、そこで命を落とすことが普通の事のように様になってしまいます。「人間の尊厳」ということと正反対なのが戦争ではないでしょうか。それはそのように持っていく政治が悪いのだとか、それで儲けている者たちがいるから戦争がなくなるならないのだということもその通りだと私も思いますが、戦争ということを考える時、自分の心、内面と無関係に考えてはいけなと私は思います。政治（家たち）が戦争へと惑わすように仕向け、けれどもそれを私たち民衆や市民が受け入れていかなければ食い止められる要素はあると

思います。けれども、私たちは惑わされやすいのですね。いつしか組み込まれ、心まで支配されてしまうのですね。

[2] むなしい幻、欺きの言葉を語る者よ

今日のエゼキエル書の言葉というのは、ある意味、そのような惑わしの言葉、人を乗せるような言葉を語る者を「わたしはお前たちに立ち向かう」と、とても厳しく訴えています。まだまだエゼキエル書には明確な救いは出てきません。とても厳しい言葉の羅列があります。

今日は13章ですが、まず13章の初めでは「イスラエルの預言者たち」に対してお前たちは災いだと言っています。3節からお読みします。「災いだ、何も示されることなく、自分の霊の赴くままに歩む愚かな預言者たちは。イスラエルよ、お前の預言者たちは廃虚にいる山犬のようだ。お前たちは、主の日の戦いに耐えるために、城壁の破れ口に上ろうとせず、イスラエルの家を守る石垣を築こうともしない。彼らはむなしい幻を見、欺きの占いを行い、主から遣わされてもいないのに、『主は言われる』と言って、その言葉が成就するのを待っている。お前たちが見ているのはむなしい幻、お前たちが口にしているのは欺きの占いではないか。わたしが語ってもいないのに、『主は言われる』と言っている」とあります。

また、9節以下にも、そのような偽預言者たちや占い師たちに対してこう訴えています。「平和がないのに、彼らが『平和だ』と言ってわたしの民を惑わすのは、壁を築くときに漆喰を上塗りするようなものだ」。それは剥がれ落ちるだろうと。更に17節以下では「呪術の頭巾（ずきん）を作る女たち」に厳しい言葉を語られます。彼らは、真の神の言葉を伝えたのではなく、耳障りの良い、または占いのようなむなしい言葉を人々に語っていたのです。そして、多くの者たちがそれを喜んで聞いていました。あの「バビロン捕囚」という民族の危機を経験し、誇りを失った者たちにとっては否定的な言葉よりも、自分たちを鼓舞し、受け入れ、肯定してくれる言葉は心地よかったですね。有事の時（戦時中）というのは、力ある者が語る麻薬のような言葉（幻のような言葉）に心が捕われ易いのです。

それに対して主なる神は20節でこのように語られています。「主なる神はこう言われる。わたしは、お前たちが、人々の魂を鳥を捕らえるように捕らえるために使っている呪術のひもに立ち向かい、それをお前たちの腕から引きちぎり、お前たちが鳥を捕らえるように捕らえた魂を解き放つ。」

神である私はお前たちの呪術のひもに立ち向かい、それを引きちぎると言います。惑わす者に対する裁きをわたしは行う！ と。そして「お前たちが鳥を捕らえるように捕らえた魂を解き放つ」と宣言されるのですね。この宣言は、神様に背を

向けたイスラエルの人々への赦しでもあると思います。そして、その宣言は、それから約 600 年経った時、神様は救い主イエス・キリストを地上に送ることによって決定的な事実になったのです。私たちは幸いなことに、このイエス・キリストの十字架による赦しと贖いという恵みの中に生かされています。

[3] 自由な者として主に従う

今日のエゼキエルの言葉は、このように最後の方で希望が見えます。22～23 節では、「お前たちは、…彼らが悪の道から立ち帰って、命を得ることができないようにしている。それゆえ、もはやお前たちがむなしい幻を見ることも占いをすることもなくなる。わたしは、お前たちの手からわが民を救い出す。」とあり、偽預言者に対する裁きと、ご自分の民をどこまでも見捨てず、救い出すのだ！ という神様の憐みを見出すことが出来ます。

最近、カトリックのシスターの岡 立子(りつこ)さんの文章を読む機会があって、その中でハッとした言葉に出会いました。このような言葉です。

「神は人間を造った時、「リスクを冒した」とユダヤ教伝統は言う。まさに人間に、ご自分の最も深い真理—自由—を与えることによって。

人間だけが、神の姿を存在の奥深くに運んでいる。そして神でさえ、人間の自由に触れることが出来ない。もし神が人間の自由に触れたなら、人間はもはや「自由」な存在ではなくなる。神はたとえ人間が罪を犯したとしても、無理やり、強制的に人間の心に入り込むことはできない。そのように人間を造ったのだから。救いの歴史を根底から支えているのは、人間が、罪を犯した後、自らそれを認め、悔い、ふたたび神に心を向け、立ち返ることを促し、助け、辛抱強く待つ神である」。

本当にそうなのだなあと思いました。私たちは「自由」な存在、自由な民なのです。エゼキエルの時代もそうでした。神に背を向けることも自由、また、主の聲に自分で聞き、従うことも自由なのです。これこそ本当の「人間の尊厳」ではないでしょうか。そして、主は決して民を見捨ててはいるわけではありません。13 章でも、幾度となく「そのときお前たちは、わたしが主であることを知るようになる」と語られています。主は生きておられる、ということですね。

主は、目には見えません。イエス・キリストも肉眼では見る事が出来ません。けれども、その方が私と共に生きておられる方として生きているかどうか、そのことが私たちに問われているのではないのでしょうか？ 丁度あの創世記のノアの物語のように、愚直のように神様の言葉を受け止め、それに信頼して生きてゆく。具体的にはまだ洪水が起こる前から、時間をかけて箱舟を造ってゆく。ノアは一人

では箱舟を造れなかったでしょう。コツコツと家族で協力して造ったでしょう。教会もそうなのでしょうね。惑わす言葉がこの世界には満ちていると思います。けれども私たちは自由な者として、神様の言葉を聴き、イエス・キリストの救いの成就を信じて、ある意味、肅々と安んじて信仰の生を歩んで行くのだと思います。

私は今日、招きの聖句で読んで頂いたこの聖書の言葉を、最後にご一緒に聴きたいと思います。私自身に対するチャレンジだとも思っていますし、この、私たちを落ち着かせない事柄に囲まれている今の世界にあって、教会に対しても語りかけられている言葉だと思います。

イザヤ書 28 章 16 節。

「それゆえ主なる神はこう言われる。

わたしは一つの石をシオンに据える。これは試みを経た石

固く据えられた礎の、貴い隅の石だ。

信ずる者は慌てることはない」。

お祈り致します。